



ドリームズ カム トゥルー (ドリカム)

2023年4月

2020年春学期から大学キャンパスは封鎖され、授業も対面からオンライン授業に切り替わりました。当時は聞きなれない zoom というアプリでリモート授業。私は zoom の練習が終わるとヘトヘトに疲れました。このヘトヘトは、授業自体学生に単位を取らせることを目的化しているようで、「大学の崩壊」ではないかという嫌悪感につながっていました。が、現時点で過去3年間を振り返ると、若者たちにとっては、必ずしも暗黒の日々ではなかったようです。

1. 「私の名を呼ぶ女子学生」：2022年3月13日。対面授業復活の日の秋田キャンパスは快晴。2年ぶりに若手教員と雑談中、大きな声で私の名前が呼ばれました。笑顔の主は、2021年に履修した学生。p c スクリーンがオフラインになった瞬間のことでした。彼女は卒業後、英国の大学院に進む予定とのこと。

2. 「大曲の花火職人」：授業開始前の東京出身の女子学生との雑談。リモート授業になった2年間、正社員として、秋田県内の大曲の花火製造会社に勤務。2022年の秋学期からフランスに留学。動機は、将来の日仏の花火技術のコラボ。自ら会社に部長兼部員一名の国際部を設立。花火職人たちは完ぺきな秋田弁を使い、東京育ちには難解な言葉でも、彼女は100パーセント理解できるとのこと。

3. 「休学して海外勤務」：2020年クロアチアに留学中にコロナ蔓延、さらに地震発生で急遽帰国した女子学生。外務省の海外研修プログラムに合格し、スロベニア大使館勤務。昨年の秋に復学し、ドイツ留学後本年帰国。オンラインによる知識の蓄積より、ヨーロッパを見分し、オフラインのキャンパスに戻ってからの学習を選択した学生。

4. 「ビッグになって御馳走します」：1年休学して資金を作り、バックパッカーとして海外漫遊の大男。ソウル大学への留学を志望し、なぜか私に推薦状を依頼。当大学から初めてのソウル大学への留学生。ソウル大ではオンライン授業だったようです。昨年、本人からの卒業後の報告です。

私の危惧したウェブ授業は、若者たちにとっては、受講方法の選択肢の拡大にすぎなかったようです。高齢の教員にはきついインターネットの世界も、若者たちにとってはスマホと同様の使い勝手。その意味で日本の大学生たちは国際標準を満たしているようです。

パンデミックという「夜明けの見えなかった夜は」明けつつあるようです。半面、世界を分断するような戦争の勃発。グローバリゼーション、デジタルゼーション、ダイバーシフィケーションを絡めた負の側面の顕在化は続くようです。

江原晴郎（国際教養大学特任教授）